

〈特集「人間とは何か」3〉

人間論

西洋哲学の展開を軸として

今道友信

方法論

西洋哲学の人間観を中心にしてシニムボジウムの問題点を刻み出すというのが、この際私の引き受けなければならない課題である。しかし、一口に西洋の哲学と言っても、古代、中世、近世、現代に至る二千五百年以上もの歴史があるに加えて、そこでは常に人間が問われているので、短時間に巧みにまとめることは不可能に近い。その上、私は体系的思索を仕事とするものであって、哲学の歴史を専門とする学者ではないから、この課題に適任とは考えられないが、ひとつの方法を工夫して、与えられた任務を果たしてみたい。その方法とは以下のようなものである。すなわち、体系的に考えて人間論の基本となる条項を定め、その中で西洋哲学史の代表的概念と見られるものうち三つで一組を成す概念を取り出

し、これに応じて古代、中世、近世を特色づけることのできる三概念を析出し、それぞれを理念と関係させながら、自ら東西の比較の問題点が明らかになるような指摘を試みる、という方法的行程である。時間の関係上、この方法の過程的操作の詳細は省略し、右に述べられた諸分節に従ってそれぞれの結論を明らかに掲げ、重点を能うかぎり人間に関する思想の比較に置くようにする。

人間論の手がかり

人間とは何か、という問いに最も端的に答えている哲学的な定義のひとつは、それが理性的動物である、という言葉表である。この場合、「理性的」という限定詞の意味を追究するのもひとつの手であるが、ここでは、理性的動物としての人間がその理性的であることを示す機能に注目して考えてみたい。その方が理性的のみ

に注目するよりも人間全体を考えるには適当なことになるからである。さて、それを考えるには、西洋哲学の発端を成し、現在に至るまでの伝統に於いても重要性を失わずにいる思想に注目すべきであるが、それは何かと言えば、衆目の一致するところでは、ギリシア哲学である。そこでは、この人間の機能をどのように考えているか。それは、理論(theoria)、実践(praxis)、制作(poiesis)の三つに分けられている。これを基にして論じ進めてみよう。

真理について——理論考——

理論(theoria)は言うまでもなく真理に迫る人間の思考の自己呈示である。それはどのようにして可能なのであるか。ソークラテースは「哲学者の最大のオルガノン(道具)はロゴスである」と言うが、このロゴスが真理の理論化を可能にするのである。ギリシア語でロゴスは実に多義的であり、真理、概念、推理、宇宙の理法、命題、言語等であるが、これは決して故なしとしない。そもそも西洋哲学では、真理とは概念を介する推理によって宇宙の理法を命題の形式で言語に表されるものと考えられている。ここで傍点が附されている語はその直前に列挙せられているように、いずれもロゴスの意味群である。つまり、真理とは、人間に於いては、ロゴスの同一性の変容的自己運動の結果なのである。

この点に関して東洋の思想はどういうものであろうか。ロゴスに対応するような言語現象としては、日本語の「こと」語群であ

る。周知のように、漢字で書くと言語に示される事象聯関がわからなくなるが、そもそも、事象(こと)を理解するための分析によって成立する理論(ことわり)は当然、事象を分割した一部であり、事象より小さく、かつその「ことわり」を示す言葉(ことば)は「こと」の「は」であり、事象の一片に過ぎない。従って、そういう微小なものでは到底「真理(まこと)」「ま」は美称)すなわち「完成された事象」をとらえたり表したりすることはできない。「まこと」は真であると同時に、言葉ではなくこれを完成してゆく行為たる誠(こと)の端に止まらずそれをもとにして成し遂げられてゆくもの)なのである。ここに人間を真理認識に関して見た場合の東西思想の比較の原点が明らかにせられた。それは真理と言語の關聯度の異同でもあるとともに、真理と人間の関わり合いの問題でもある。真を人間が発見し言表する西洋の考えと真を人間が行為により実現してゆく東洋の考えとは、人間の真の在り方についても多少の異同があろう。それはどのように考えらるべきか。

人格と責任——実践考——

右の真理に関する人間の省察は、西洋の古代ギリシア哲学を基にして考えてみたものである。ここでは、その際の結論に含まれる問題を、西洋の中世に關係させながら考えてゆきたい。前節で明らかにされたように、人間は、西洋のように言語認識に依拠

するにせよ、東洋のように行為の実現に依拠するにせよ、いずれにしても自己を「真」に向けて方位づけることのできる存在であるし、それにはその方位を決定し維持する努力が必要である。ということとは、真を求めるにはいずれにしても人間には自己に対する実践的配慮が肝要なのである。実践 (praxis) の主体は何か。それこそ知情意の統一としての人格 (persona) である。何故ならば、ポエーティウスの有名な定義によれば、「メルソーナは理性的本性の個々の実体である」からにはかならない。さて、このようにして中世初期から西洋の人間論の中心に据えられたこの概念は、単なる自我と異なつて、意識せられると否とに拘らず、人間の宇宙に於ける位置を、これをもつ限りでは、神や天使と同系統に置くところの存在論的位格なのである。そして、これこそは古典ギリシア哲学にはなかつた概念で、キリスト教的中世の特色を示すものである。しかし、この語はポエーティウスも言う通り、仮面と関係のある演劇用語である。人生を演劇にたとえてみれば、確かに仮面を使用する役者としてのメルソーナがいなければならぬから、この概念は貴重であるが、これと同時にこの役者は作者の筋書や相棒の他の役者の言動に応じ答える (respondere) とすることがなくてはならず、つまりそのような応答性 (responsivité) としての責任 (responsabilité) が常に重視せられなくてはならない。実践 (praxis) の面からみると、人格と責任とは最も大切な概念であり、前者は存在論的基底として、後者は倫理的徳と

して、人間論の中核をなすものである。

ところが、全く不思議なことであるが、西洋に於いては、決断の主体たる人格は早くから深く反省せられていたにも拘らず、実践的徳としての責任に該当する概念はギリシア語にもラテン語にも見当たらず、契約社会が近代化した十八世紀後半に至って先ずフランス語の *responsabilité* 次に英語の *responsibility* が使われ、ドイツ語の *Verantwortlichkeit* に至っては十九世紀末に作られる始末であつた。すなわち、西洋の人間論は長く人格論であり、責任が徳として人間論の一部を形成するには未だ時期尚早と言ふにひとしい。この全く逆のことが東洋の人間論に当てはまるので、東洋 (漢字文化圏に限る) の伝統的古典には人格に該当すべき概念は全く見当たらずに、応答としての責任に当たる単語乃至概念があつて、その代表的なるものは義である。これは字の構造からみると、羊を我が敵げ持っているとか背負っているとかという意味になるが、この羊は「告朔之餼羊」などで表されるような祭儀の犠牲であり、それを村落なり団体なりに代わつて自己が担うということ、それはつまり、天と自分の仲間とに対して自分が重大な責任をもっているということにはかならない。しかるに、人格、それも存在論的位格を表すほどの語でなくてせめて人間の内的統一の道德的主体を表す如き概念としての人格、これに当たる単語乃至概念は、東洋に於いては古典期や中世には見当たらず、人間にのみ妥当する語にしても王陽明らの「良知」

が幾らかそれに近づいている、ということができるに止まる。東洋（漢字文化圏に限る）に於ける人間論は実践に関する限り、仁義礼智信の枢要徳を見ても明らかのように、関係としての間柄に於ける態度としての徳に注目し、人格論ではなく責任論なのである。

実践に即してみると、人間の在り方についての東西思想の根本的差異がこのようにして「個位的格の重視と責任の無視」か「個位的格の無視と責任の重視」という殆んど反対対当の形式で明らかになっている。それでは、それぞれ偏って展開して来た人間の実践に関するこの経緯は何を我々に示唆するのであろうか。時を経ればいずれの側も自己の伝統を充全化しようとしてよいのであろうか。

表現と再現——制作者——

右の実践に關しての人間の省察は、西洋の中世を基にして行われたものである。ここでは、その際の結論に含まれる問題を近世に即して考えてゆきたい。前節で明らかにせられたように、真を求め人間が実践に際して自己を定位するとき、新たに問われる善は「個的人格の成長」となるのか、それとも「他者との関係の發展」となるのか、という問題が立てられて来る。これはつきつめてみると、内部世界の問題と外部世界の問題に一般化せられるであろう。西洋の近世思想は、周知のように、デカルトの自我の

確立に於いて開花するのであるが、これが中世のペルソーナの開明に負うところは大きいにしても、それを決定的に異なる点は、デカルトの自我の確立は人間の自我の確立であり、その保証は存在論ではなく認識論による、ということである。そして、このようにして確立せられた自我は内部世界の豊饒を外化する傾向を育成する。これは外部世界の美しさを人間の手で写しとろうとしたところの、それまでの芸術制作（ポイエシス）の理念であった模倣（ミメシス）としての再現（représentation）とは全く反対の「絞り出し」としての表現（expression）を生み出すに至った。この表現は西洋では全く新しい語であり新しい概念であった。expression というラテン語も古典期には見当たらず、その後使われていても果汁をじぼり出すという農業用語にほかならない。これが芸術制作に関する美学的術語となるのはフランスの十八世紀に萌芽がみえる位で、正式に美学術語となるのは十九世紀のことである。しかるに、東洋では、むしろ同じ時期に、渡辺華山らが写生すなわち外部対象の再現を唱え始めたのであり、それまでの伝統的理念は、写意すなわち expression 表現であった。その辺の事情は、あたかも前節の実践の場合と同じく、言わば逆現象の同時展開が見られるのである。しかし、制作の事実をみると、事情はしかく単純ではない。西洋の表現は、機械の再現力の及ばない内部思想乃至情感の自己表白であるのに対し、東洋の写意としての表現は、むしろ「氣韻生動」にうかがわれるように、人間

が宇宙の神韻を聴取しこれを体得するという半ば宗教的な神秘思想に支えられている。前者が自我主張であるに対し、後者は自我抑制なのである。それゆえ、単に概念上の同一性や言語上の類似は必ずしも人間の制作の実態が同一であるとか類似であるとかということとはできない。それは作品の事実経験からも知られることである。

結 論

全体の結論として、我々は、次のように言うことができよう。人間論に関して、我々は東西の思想が、理論、実践、制作に関して、ほぼ相反的な面があり、時代的に概念上の補填はそれぞれ自己の歴史の内部で果たして居り、その意味では相接近しているが、実態としては尚遠いところがあり、意図的に相補性の実現をはからなくては、人間の自己省察は充全の形で人類に可能とはならないであろう。尚、上述の考察を図示すると下のようである。

(原文は、旧仮名づかいによる。)

人間の三態	比較概念		扱った時代	理念
	西洋	東洋		
theoria	Logosと「まこと」	—	—	—
praxis	人格と責任	—	—	—
poiesis	再現と表現	—	—	—
			古代	真
			中世	善
			近世	美

(いまみち・とものぶ、美学、東京大学教授)